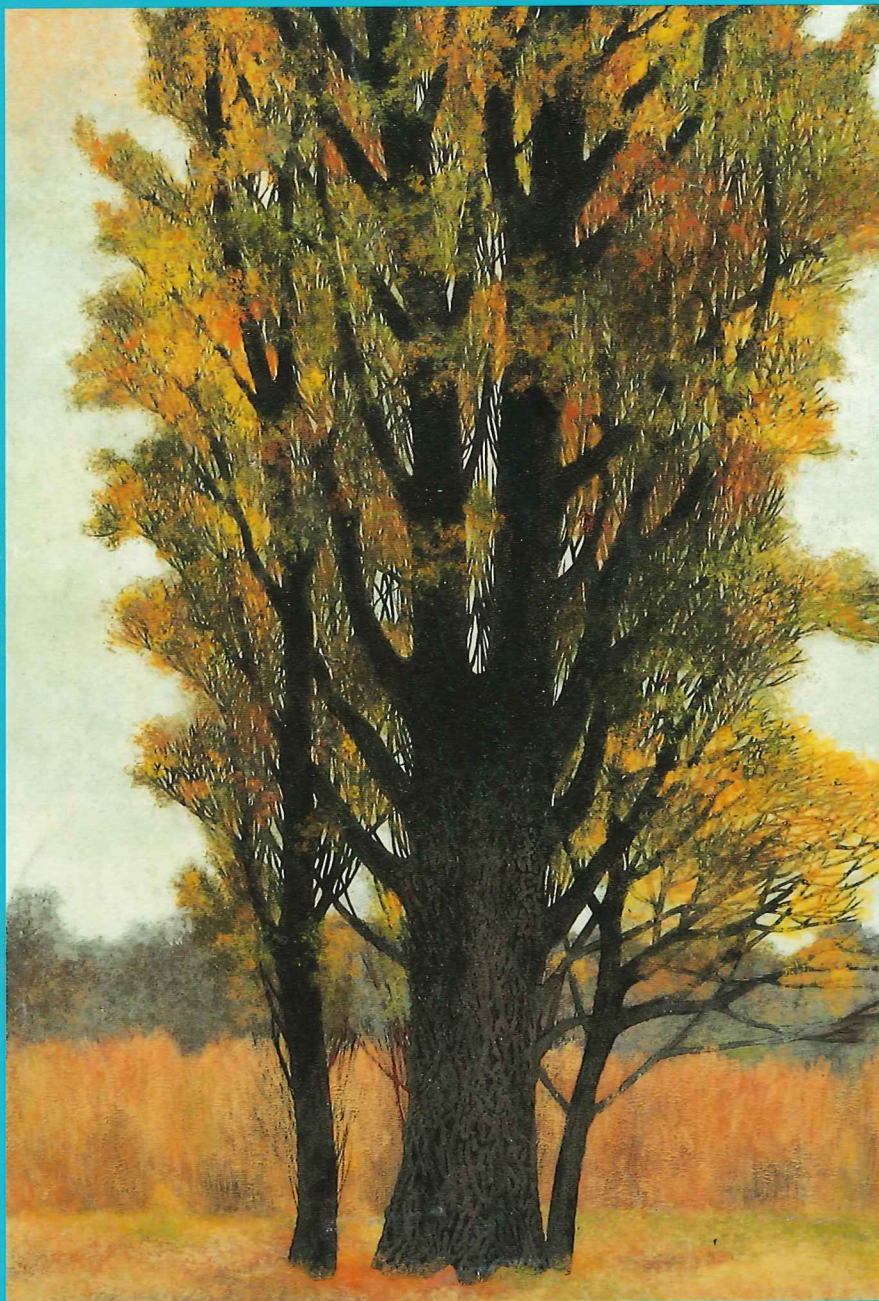


# 成溪會誌

1996. 6 No. 83



## 就任

工学部長に就任して  
法学部長に就任して

桐澤 潔 ..... 2  
加藤 節 ..... 3

## 特別寄稿

塩の文化と高血圧  
首都機能の移転

黒川 清 ..... 4  
三井 康壽 ..... 10

## 対談

〈地方主権の時代〉を創造する

藤田 雄山 ..... 14  
宇野 重昭 .....

## 随想

木版画を楽しむ  
琉球王国賛歌  
旧制時代の成蹊ラグビー回顧  
空への想いを忘れない  
ボクニカル・アート(植物画)の楽しみ  
桃中軒由来記  
時計の原点  
プロペラ開発海から陸へ

清水 晴男 ..... 17  
ゆたかはじめ ..... 18  
高島 信之 ..... 20  
大木 栄一 ..... 23  
黒川 和典 ..... 24  
宇野 統彦 ..... 27  
松本祥一郎 ..... 28  
中島 康博 .....

## 海外だより

イギリス《大人の国》  
パリに居て思うこと  
サイパン観光事情  
MICRONESIAでの生活

小田原紀興 ..... 32  
力石 浩 ..... 33  
本間 久喜 ..... 35  
三野 武彦 ..... 37

表紙絵の言葉 / 38

OB音楽グループへのお誘い・成蹊囲碁の会へのお誘い・  
成蹊教育会誕生 / 39

成蹊小学校開校80周年祝賀同窓会・塚原俊平通産大臣を祝う会 / 40 ~ 41

## 同窓のついで

- 第十九回桜祭 ..... 42
- 学年・年次会のついで ..... 44
- 桃伍会 桃禄会 新宿成蹊会 高校卒業30周年  
高校卒業40周年 大学卒業30周年 香取先生クラス会  
こぶし会 やよい会総会 一南会 田中一行ゼミ会  
廣野ゼミ同期会
- 体育会・文化会OB会 ..... 49
- 雪蹊会創立30周年 旧高ラグビーOB懇親パーティー  
成蹊ラグクラブ総会 グリッククラブ第40回定期演奏会  
結城信子さんを偲ぶ会 準硬式野球部OB総会  
フェンシング部創部30周年 ラグビー部桜祭
- 業界・企業同窓会 ..... 52
- 魚河岸成蹊会 三菱化学菱蹊会 IHI成蹊会  
日立桃季会 成蹊職業会計人会 成蹊VZ会
- 地域同窓会 ..... 54
- ニューヨーク成蹊会 ロンドン成蹊会  
オーストラリア・クイーンズランド成蹊会  
北海道成蹊会総会 宮城成蹊会 遠州成蹊会  
愛知成蹊会 三重成蹊会 芦屋察歌祭  
九州支部創立45周年

物故 / 58 地方同窓会連絡先一覧 / 59

オチコボレにとつての成蹊教育 / 60 服部隆之氏に聞く / 62

『志賀高原の歌』誕生・小学校ラグビー部ジャパン・フランスに参加 / 64

学術・教育助成研究報告 / 66 第73回枯林忌 / 68

平成7年度成蹊会事業報告 / 69 退職挨拶 / 70

『70周年気象観測報告』刊行のお知らせ / 73

成蹊学園の近況 / 74 学園史料館資料紹介 / 80

図書館蔵書紹介 / 82 アジア太平洋研究センター / 83

予告 / 84 平成7年度寄付金芳名録 / 85 成蹊会報告 / 86

表紙の題字は上條信山先生、絵は高山知也(文52年)



長寿の国が、私は大好きだ。成蹊の皆さんにも、沖繩のことをもっと知っていただきたいのである。

沖繩はいま基地問題で揺れている。さりげなくインタナショナルな土地柄である。私の見たところ、沖繩の人はアメリカが嫌いなのではなく、基

地がいやなのだ。戦後五〇年たってもまだ、将来のビジョンが描けない日本政府に腹立たしさを覚えているのだと思う。武力に頼らない国の繁栄は、本当に考えられないのであろうか。

本名 石田稜一  
沖繩県行政オンブズマン(旧高・22年)

### あの日の時

## 旧制時代の成蹊ラグビー回顧

高島 信之

### 対抗戦が原則

我が国のラグビー界では、英国の伝統にならって対抗試合を本則とし、原則としてリーグ戦或はトーナメント大会によって優勝を争う試合形式をとつ

ていなかった。ラグビーのゲームは互に尊敬するチームを選んで行うべきであるというのがそのスピリットであった。

この伝統は現在では必ずしも守られておらず、大学選手権、社会人大会な

代、黄金時代という一種の決めつけは、余りラグビーというスポーツの伝統にふさわしいとも思われないので、創部以来の旧制成蹊高校ラグビーの流れに触れて最後に多分寄稿依頼の理由と思われる第二回全国大会について書くことにする。

上初の海外遠征(カナダ)を行った際、香山蕃氏(日本ラグビーのリーグで遠征チームの監督)は、当時成蹊に在学中であった南郷茂治、伊知地清両先輩(第四回)を全日本軍に選抜したが、学校が高校生の遠征を許さず実現しなかったそう、個人的には既に名プレイヤーを輩出している。

### 大学チームへの挑戦



ラグビー部 播監期

成蹊ラグビー部は第一回卒業の大平成美氏を中心とした先輩達によって発足し、大正十三年頃から対外試合を行うようになった。当初は東大や慶応などの指導を受けて高校ラグビーとして先進チームであったが、当時は高校ラグビーチームも少く、組織化された大会のようなものではなかったようである。七人制ラグビーでは全国高校大会が行われ成蹊が全国制覇を遂げた年もある。又昭和五年に全日本チームが史

昭和六、七年頃から関東の旧制高校のラグビーも次第に盛んになって来た。昭和八年には成蹊は前に触れた全国七人制大会(第四回)で準優勝し、関東では高校相手の試合には全勝している。この頃から高校同志の対戦が関東高校リーグとして組織されたようだが、成蹊が全勝で優勝したわけである。前記成蹊ラグビー五十年史の記述によるとこの頃から成蹊は高校のレベルを脱皮して当時関東七大学と称せられた大学チーム(早慶明立東の五強に加え、商大法政の七大学)への挑戦を目標とするようになった。そして昭和九年度のシーズンに前述した対立教大学戦を迎えることとなる。この年十月初旬に東京商大(現一橋大)との一戦で村上氏の負傷退場の事故もあって惜敗したが、その後対立教相手の試合には勝ち続け、

どの全国的なトーナメント方式の大会も導入されたが、この伝統は部分的には残されている。

例えば、現在関東大学の対抗戦グループにあっては、どのチームも自ら選択したチーム以外のチームとの試合を他動的に組まされることはないし、優勝その他順位も公式にはつけられていない。(但し全国大学選手権出場チームを決定するための上位校の決定は行われるが、これとても、大学によって試合数も相手も異なるので理論的には厳密な決定とは言えない。)

一部の人はこれを批判して一部二部制をとることを主張するが、このような鷹揚なところがラグビーの良いところでもあろう。

### 黄金時代とは?

前置きが長くなったが、今回の編集者からの御要望が成蹊ラグビー部の黄金時代についての寄稿ということと考えたので、敢えてラグビー界の伝統に触れたわけで、前記のような精神で記録上の勝敗に拘わらないスポーツにあつては、客観的にいつ頃が全盛時代とか、最強であったかを決めるのは難しい。殊に旧制高校時代の成蹊のラグビーは高校界では常に強かったし、あら

十一月十七日に立教大学を成蹊グラウンドに迎えて試合を行った。ゲームの詳細は五十年史に譲るが、十三対九で快勝し、翌日の新聞に「成蹊善戦し立教を破る」との見出しで記事が掲載されている。この試合のメンバーをみると成蹊大学チームを破ったフィフティーンにふさわしく後に東大京大で活躍したプレイヤーが揃っており、全日本にも選ばれた石黒孝次郎氏なども出場している。シーズン後半東大との試合は惜敗に終り、結局七大学への挑戦は一勝二敗に終わったが当時関東五強の一角立教に勝つたのはやはり旧制高校としては格段のことであったといふべきであらう。

翌昭和十年度には、成蹊は立教大学には勝てなかったものの東大を破り、東西対抗試合で(例年は選抜チーム同志の試合であったが、この年は東西の一位同志が戦うことになった)、成蹊は関西一位の姫路高校と対戦、これを大差で破って実質的に高校日本一となった。この年の毎日新聞のラグビー総評には成蹊は七大学の一角を崩すものとの評を受けている。

### 甲南との定期戦

昭和十一年度以降も成蹊は順調な発

ゆる意味で判定が困難である。

このたび私が寄稿の依頼を受けたのは、昭和二十一年のインターハイ全国大会に成蹊が優勝したときに主将を勤めていたからと考えるが、前述のラグビーの伝統は旧制高校界にも永く尊重され、昭和十七年まで高校ラグビーの全国大会は開催されなかった。但し七人制大会は毎年開催され、成蹊は優勝の記録も含めて毎回出場し活躍した。尚専門学校、大学予科を含めて行われた高専大会も例外であったが、部史をみると成蹊は参加したり、不参加であったり、この大会に余り重きを置いていなかったようである。その後全国大会は第二次大戦のため中絶し、戦後昭和二十一年に復活して第二回全国大会が開催され、成蹊が圧倒的な差を以て優勝を遂げたのである。

戦前の成蹊のラグビー史を閲覧すると、成蹊は高校でありながら大学のラグビーチームにもしばしば挑戦している。そして、成蹊ラグビー五十年史は(和田象二氏執筆部分)、昭和九年第八回卒業の中村元先輩が主将の年に立教大学を破つたその頃を以て成蹊ラグビーの第一期黄金時代としているし、客観的にも強チームであったことがうかがわれる。然し、前述のように全盛時

展を続け、関東高校リーグ五連覇を遂げた。昭和二十二年には、伝統的な好敵手である甲南高校と第一回定期戦が行われ、成蹊が快勝した。この年の高校東西対抗は恒例により選抜チームで行われたが、十五名中九名が成蹊の選手であったことから当時のレベルの高さが偲ばれ、殊に石黒孝次郎氏の活躍にラグビー界の大先輩宇野庄治氏は読売新聞紙上に一九四〇年予定の全日本英国遠征の中心選手となるであろう大型プレイヤーと激賞している。

(この遠征計画は残念ながら実現しなかった。)

昭和十四年度成蹊は初めて関東高校リーグで成域に破れ優勝を逸したが、昭和十五年には再び関東の覇者となった。然し残念ながら、甲南との定期戦には連敗している。昭和十六年頃からは種々戦争の影響も出て来たが、昭和十七年には第一回全国大会が行われた。成蹊は決勝で甲南と対戦し、又しても甲南に名をなきしめている。

### 戦前最後の試合

この年の頃から戦局は次第に熾烈となり、各チームのラグビー部も解散・休部を余儀なくされるようになったが、成蹊は何とか練習を続けていた。特筆

すべきことは昭和十九年の十二月には  
成城と対抗戦を行っていたことである。  
当時既にサイパンが陥落し、B29が空  
襲に飛来するようになっていたが、空  
襲の間をくぐって試合を執行し、成蹊  
が快勝した。この試合は恐らく戦前最  
後のラグビー試合であり、又成蹊の芝  
のグラウンド（現在の工学部校舎のと  
ころ）での最後の試合である。（昭和  
二十二年に成蹊が軍に接収された折にい  
も畑と化してしまった。）

### 戦後の復活

戦後成蹊ラグビーは他校にさきがけ  
て復活した。昭和二十年の十一月二日  
成城グラウンドで戦後初の試合が各校  
混合の紅白試合で行われた。この試合  
は当時復員していた東大、慶応、成城  
成蹊の選手を中心に行われたが、この  
試合を取材した「ナンバー」誌には、  
私にとって多くの懐かしい名前が見ら  
れる。この試合にはOBの故原田三治  
氏を含め成蹊から六名出場している。  
このようなラグビー復活の下、成蹊の  
陣容も次第に整備されて昭和二十一年  
のシーズンを迎えることになる。

昭和二十一年度には恒例の関東高校  
リーグも復活し、成蹊はこれに全勝優  
勝して十二月の全国大会に出場するこ

ととなった。この年度も成蹊は戦前の  
伝統にない、シーズン初めの早大戦  
を皮切りに、東大、明大などに挑戦し、  
勝利を得るまでには至らなかったが、  
相応の善戦を行っていた。関東高校リ  
ーグでの勝利は殆どが大差の勝利であ  
った。

### 第二回インターハイ優勝

昭和二十二年の十二月、京都大学の  
グラウンドで第二回インターハイ全国  
大会が行われた。全国から八高校（関  
東のみ成蹊、学習院の二校）が出場し、  
トーナメント形式で争奪された。

この大会を前に私はひそかに打倒甲  
南の思いを抱いていた。前に書いてき  
たように、昭和十二年を最後に甲南に  
連敗しており、然も第一回全国大会の  
決勝でも甲南に敗れている。今年こそ  
は甲南に雪辱する絶好の機会と考えて  
いたが、残念ながらこの年は甲南が浪  
高に敗れて全国大会での対戦はならな  
かった。然し王者甲南を破った浪高の  
強さは大いに喧伝されていたので、気  
持を切り替えて大会に臨んだ次第であ  
る。抽選の結果、皮肉なことに東西一  
位同志の優勝候補が一回戦で対する  
こととなり、成蹊も大いに緊張して試  
合に臨んだが、二四―三で快勝し、二

回戦（準決勝）に北大予科、決勝で学  
習院との再度の対戦に勝って初の全国  
優勝を遂げたのである。

### C・スコットの記念碑

以上昭和二十一年の全国制覇を締め  
くくりとして旧制高校時代の成蹊のラ  
グビーを語って来たが、最後に私はラ  
グビー部員のみならず、成蹊の学生諸  
君、又OB・OG諸兄弟にも、成蹊ラ  
ウンドのほとりに建てられている記  
念碑に刻まれている詩を是非御観賞願  
いたいと思う。この詩は第一次大戦で  
戦死したラグビープレイヤーを謳った  
英国の詩人C・スコットの詩であるが、  
この詩こそ成蹊ラグビーの真髄ともい  
うべき純粋なアマチュアスピリットを  
象徴するものである。是非OB・OG



の皆様にも成蹊を訪れて実物を御覧頂  
きたいが、ご多忙な方々のためにその  
詩を引用してこの稿を終えることとす  
る。

「栄誉ある勤めの為し遂げられた時に於てすら

我々は君達の名声を思ふふとはしない

又君達が戦ひに勝った事を思ふものでもない

だが君達が唯戦ったと言ふ事 それから君達の

あの楽しげな高らかな笑ひを思ふ

君達は賞讃とか非難とか言ふ事がこの上もなく嫌ひである

だから我々は君達の碑に刻む

He Played The Game」

ローガン・高島・根本法律事務所

（旧高・22年）

## 空への想いを忘れない

### 大木 栄一

旧制高校の時代にグライダーの操縦  
習得を目指して相集い、空への想いを  
燃焼させた若者達がいた。その集団を  
「旧制成蹊高校滑空班」と呼ぶ。この  
程その歴史を、記事と写真にまとめて  
成蹊史料館に納めることが出来たのを  
期して、その概要を記し会員諸氏に伝  
えようと思う。

### グライダー発祥の地、霧ヶ峰

第一次大戦に敗れたドイツは飛行機  
の製造を制限され、かわってグライダ  
ーの製造と操縦技術の発展に力をそそ  
いだ。この姿に強い関心を持ったのが、  
霧ヶ峰近くの角間新田出身の藤原咲平  
博士であった。そして昭和7年藤原博  
士が会長の「霧ヶ峰グライダー研究  
会」が発足している。藤原博士は気象  
台長も勤められた気象学の権威である  
が、成蹊の加藤藤吉先生が力を注いで  
いた気象観測を高く評価されていたと  
いう。成蹊と霧ヶ峰との関係はこのよ  
うな低流で繋がっていたのかと今更の

ように驚かされる。尋常科一年の時、  
加藤先生が小生の担任であったが当時  
の尋常科生徒で気象観測を毎日続ける  
ように教育されたことを思い出すのは  
私一人ではあるまい。  
このような繋がりを背景として、か  
ねてより成蹊にグライダー部を創立し  
たいと考えていた渡辺敬介氏（14回  
卒）が昭和13年の夏に同僚の三好氏と  
ともに霧ヶ峰の合宿に参加してはじめ  
てグライダーに搭乗したのが当学園に

おける滑空班の誕生であった。

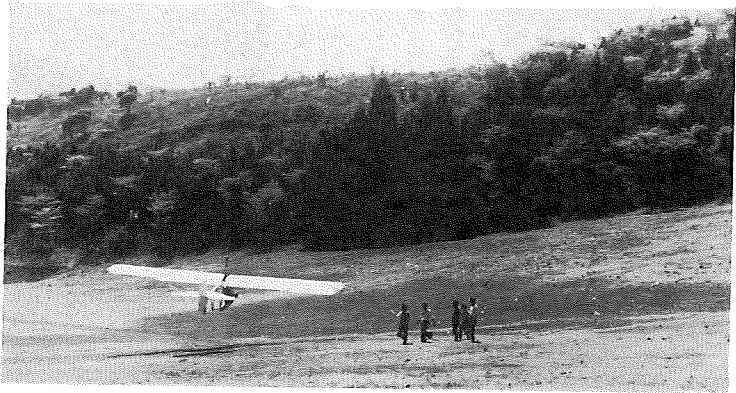
### グライダーをどうやって 飛ばしたか

現在はグライダーは当然ながらスポ  
ーツとして存在しており、機種として  
はソアラードだけで、これを操縦して如  
何に遠く、あるいは速く、あるいは高  
く飛ばすかという種目を競うグライダ  
ー競技が、世界的にはFAI（国際航  
空連盟）が統括し日本では日本航空協  
会の管理のもと日本滑空協会が全国統  
括団体として競技を行っている。操縦  
訓練も複座のグライダーにいきなり教  
官と同乗して空高く飛び上がるそう  
である。

かつての我々の訓練はそうはいか  
なかった。ドイツでも同じ方法をとった  
ようであるがグライダーには、プライ  
マリ、セコンダリー、ソアラードの3  
段階があった。初級者は先ずプライマ  
リーの操縦訓練から始まったわけであ  
る。この場合一人の人間を飛ばすのに  
15人程の人力が必要である。プライマ  
リーはゴム索と称するゴムを束ねた直  
径5センチ弱のひもを片側5、6名が  
V字型に分かれて引っ張り、機体のテ  
ールをしっかりとおさえた者が手をは  
なすとパチンコのように飛び出して



右から渡辺敬介氏・根本智氏・小生



箱根での練習風景

# オチコボレにとつての成蹊教育

昭和28年卒 齊藤 憐

成蹊小学校創立八十周年の今年七月、「はつ恋」という芝居を書き、小学校の同級生の山本圭君に主役の島村抱月を演じてもらった。

圭君と初めてお芝居をやったのは、今から四十四年前、小学校五年生の時だ。

それまで成蹊小学校は東組と西組との二学級だったが、昭和二十六年、新たに南組ができることになった。同時に僕たち西組の担任に野田彰先生が和歌山から、南組に大西貢先生が四国から赴任された。それで、南組の新入生と二人の先生の歓迎会をやるということになり、東組と西組の僕たちはそれぞれに知恵を絞って出し物を考えた。劇をやるうと言ひ出したのは、圭君の方からだったろう。四百メートルのグラウンドの奥にあった雑木林の中で暗くなるまで二人で稽古したことを覚えている。出し物は「泣いた赤鬼」。

山奥に住む赤い鬼が人間たちと仲良く暮らしたいと考え里に出て行く、人間たちは蜘蛛の子を散らすように逃げてしまふ。そんなある日、青い鬼が里にやって来て村人たちに乱暴狼藉を



働く。そこへ赤鬼が駆けつけ、悪い青鬼をやっつけるので人間たちは赤鬼が自分たちの仲間だと信じるようになる。やっとな人間と仲良くなれた赤鬼に、青鬼から手紙が届く。「僕と君が友達でいては、人間たちは君を信用しないだろう。だから、僕は今から遠い国に立つ。君はこれから人間たちと幸せに暮らしてくれ」と。その友情あふれる手紙を読んで赤鬼が泣くという物語。

歓迎会の本番、僕は最後の場面の大切な手紙をなくしてしまひ、圭君は青鬼の手紙を咄囀りに出さず、アドリブでこなしなにか幕となった。歓迎会の翌日、新任の野田先生から「一週間でこれだけの出し物を自主的に作り出す君たちの力に驚いた」と褒めていただいたのを覚えている。

僕は小学校から高校までずっとオチコボレだった。だから、成蹊で勉強をしたという記憶がない。では、僕にとつて成蹊は劣等感を生んだ場所ではなかったのかというところもちがう。時折、仕事の合間に庭でインゲン豆を育てたり小松菜の種を蒔いたりして、ふとあの園芸の時間に陸稲を作つて、餅つきをした喜びが自分にそつとインプットされてたかと思つたりする。

もう一つ思い出深いのは「夏の学校」。大学の水泳部のお兄さんたちが、十人程度に分けられた僕たち小学生を受け持ち、猫可愛がりしながら泳ぎと遊びを教えてくれた。水泳部のOBの伊集院先輩が試胆会の夜に話す「中島飛行場の怪談話」の怖かったこと。戦時中、腹を空かした青年が毎夜、土葬された死体を食べるのを見てしまう話。やっぱ戦後だったんだなあと思う。もう一つ、成蹊に通つてよかったと思うのが、同級生との友情だ。僕たち、昭和十五年生まれの同級生



十人ほどは、勝手に「樺会」と命名し、夏には海へ、冬にはスキーに集まる。日興電機の後藤常元君などは、小学校一年の時いたずらして一緒に立たされてからの付き合いだから、もう五十年になる。集まるとその空間では何でも許されていると、青鬼い人生論や政治哲学を口角泡を飛ばして論じ合う。六年前、当時のゴルバチョフのペレストロイカと冷戦の終結に乾杯した勢いで、この激動の二十世紀を生きているという実感を持ちなくなり、モスクワに日口合弁会社を設立し、小さなホテルとレストランを作つてしまった。その後、御存じの通りのクーデターや経済の混乱でロシアは無政府状態に陥り、僕たちはあまりにも報われぬ苦勞を背負うことになったが役員総会の度に会えるという楽しみだけは残った。その仲間たちは僕の芝居の度に、回状を回して日時を決めて集まつてくれる。今年も「はつ恋」の終わった後、圭君の別荘にその仲間たちが集まり、語つたり、喚いたり、泣いたりだった。

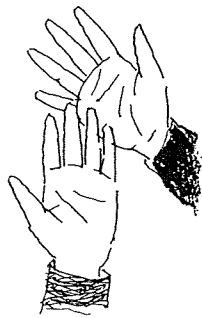
それはそうと、終戦から五年の間に成蹊小学校に入学した生徒の中からたくさんの演劇人が生まれている。

僕たちの四つ上に圭君のお兄さんの学さん、一年下には東野英心(孝彦)君と長山藍子さん、もう一年下には僕の『上海パンスキング』を演出・主演してくれた串田和美君。それから、圭君の弟の巨君と作曲家の服部克久君の弟さんで黒アントに在る良次君が続く。

あの頃、小学校の文化祭ではみんなでお芝居をやった。中学校ではクラス対抗で、芝居を出した。高校の演劇部では一年に三回の公演を持った。

一つの時代に集中して演劇人を輩出したのも時代のせいのような気がする。僕たちが小学校に入ったのは、終戦の翌年の昭和二十一年。入学式に僕たち新入生が桜並木の下を進んで行く、六年生が両脇から桜の花びらを振りかけてくれた。校庭にはまだ防空壕が残り、二年生から入った「西校舎」と呼ばれたバラック建ての校舎は雨漏りがして傘をさして授業を受けたことを覚えてる。トラスコンと設計者の名前を取つてつけられた雨天体操場の脇の食堂で取る給食は、脱脂粉乳と鯖の味噌煮とコッペパンばかりだった。

僕と圭君が『泣いた赤鬼』をやったのは、小学校八十周年の歴史の折り返しの年、本館の東側に急拵えて作られた



二階建ての木造の校舎の教室だった。今にして思えば、ほんの数年前まで日本はアメリカを「鬼畜」と叫んでいたのだから、鬼との友情という劇のテーマは明らかだ。あれから四十五年、今年の『はつ恋』のパンフレットに圭君が出してくれた僕たち二人の写っている写真は、小学校六年の遠足の時のものだが、ほとんどの同級生が制服を着ていない。時代は貧しかったが、まだ受験戦争の始まる前の時代、成蹊教育の特徴は「凝念」と「畑仕事」、文化祭では自主的に企画を練り部活動に熱中できた。つまり、あまり「勉強」に役に立たないゆつたりとした時間が、あの頃の成蹊の中に流れていたように思う。圭君や僕のような勉強のできない子でも、お芝居をするのが好きな児童はいるし、絵が上手な子が背景の絵を描き、歌の得意な子たちが音楽を受け持ち、オチコボレの子でも自分の力を発揮できる場、それが劇だったような気がする。

十五年ほど前、全国の学校でのオチコボレといじめが社会問題になりはじめた時、僕は、津軽のとある小学校の熱心な先生から「小学校教育の中に演劇を取り入れたいが指導方法がわからない」と言われたことがあった。

四十年前のオチコボレとしては、この申し出をほつとくわけにはいかない。国語、音楽、美術、体操の授業時間を使って芝居仲間と小学生クラス全員で創作劇を作る実験をやつてみたい。

たとえばモデル校を決めて、国語の時間は井上ひさしさんや別所実さん、美術なら朝倉棋さんや妹尾河童さん、音楽なら池辺晋一郎さんや林光さんといったスタッフたちが子供たちと一年間かけて劇を完成させる。それを放映しながら、ビデオでマニュアルを作るという企画を提案したことがあった。

企画を引き受けてくれるモデル校を捜してくださったNHKのプロデューサーから電話があった。「まず公立の小学校では絶対不可能。私立でも今は難しいですが、唯一可能性があるとするれば、成蹊という私立学校ですが、あなたは成蹊でご存じですか?」

もちろん、現在の文部省に決められたカリキュラムの中では、成蹊でさえ不可能だろうという結論だったが、母校の名が出てきて無性に嬉しかった。現在、目先の効用ばかりを追い求め

細分化し過ぎた科学、勉強のできた人々が作り上げた官僚支配、この戦後五十年の教育が問い直されている。

僕たちが小学校に通つていた頃の成蹊では「伝統か改革か」という論議があったように思う。当時、伝統派は保守と思われ、色々な試行錯誤があつたようだが、今になって思うのは、やはり独自性を持つてこそ私立学校の存在理由があるように思う。

詰め込み主義でなかつたあの頃の成蹊で育つたおかげで、僕のようなオチコボレも、自分一人で発想し仕事を創つていく精神と、生涯の友を持つことを学んだのだから。

## 齊藤憐氏略歴

- ・一九五八年、成蹊高等学校卒業
- ・早稲田大学露文科中退
- ・一九六六年、俳優座養成所卒業とともに劇団「自由劇場」結成に参加。
- ・一九六八年、「演劇センター68」結成に参加。
- ・一九七〇年、フリーとなる。
- ・一九八〇年、『上海パンスキング』にて第二十四回「岸田劇曲賞」受賞。
- ・著書に『斎藤憐戯曲集』の他、児童書として『象のいない動物園』『ポルシェ』などがある。